

得意・不得意に関わらず、意欲的に活動に取り組むことのできる児童の育成を目指して  
～体育科「器械運動」「ハードル走」を通して～

小牧南小学校 川合 一弘

## 1 主題設定の理由

本学年の児童は、とても楽しく体育の授業に取り組むことができる。また、運動能力の高い児童などが、アドバイスをする場面も見られ、関わり合いをもつことができる雰囲気もある。

しかし、体育が好きな児童と嫌いな児童で、活動への取り組み方がはっきりと分かれてしまうことも実情である。これは、これまでの運動経験の不足から、運動能力の低い児童や、友達とうまく関わり合いがもてない児童が、自信を失っているということが要因としてあると考えられる。しかし、ほんのわずかでも成功体験が得られると、積極的に運動に取り組めるようになることや、周りの仲間と意図的に関わり合いをもたせていけば、楽しく運動に取り組めることをこれまでの実践を通して感じた。また、人にアドバイスしたり、人前で言葉にして伝えたりすることが苦手な児童も少なくない。さらに、指示された練習や活動には素直に取り組むことができるが、自分たちで考えて、積極的に活動する姿はあまり見ることができない。表現することや進んで活動することが苦手である大きな原因として、どんなことをすればよいのか分からないということが考えられる。

それらの課題を解決するために、ここでは器械運動・ハードル走を題材として、4年生～5年生までの2年間をかけて、本研究に取り組んだ。

## 2 研究の仮説と手だて

### (1) 研究の仮説

次のような研究の仮説を設定し、研究に取り組む。

スモールステップで練習できる場を設定し、小さな成功体験を繰り返すことで、運動に対する苦手意識は小さくなり、体を動かすことが楽しくなって、自信がもてるようになるだろう。

### (2) 研究の手だて

《手だて①》運動を楽しむために必要な動きを確実に身に付け、できる実感をもたせるための工夫

- ・ 跳び箱の高さやマットの種類などを複数用意したり、ハードル走の場面ごとを切り取って練習したりするなど、スモールステップで練習できる場を設定する。

- ・ グループやペアで同じ技を練習し、児童同士で学び合う活動の場を設定する。

### 《手だて②》グループや全体で学び合うための工夫

- ・ タブレット端末（以下タブレット）を活用し、互いの動きを撮影し合うことで自分の動きをすぐに確認したり、動画を保存して、手本の画像と照らし合わせたりしながら、意識するポイントを分かりやすくさせる。
- ・ 自分の意識しているポイントをアドバイスシートに書き出し、全員で共有することができるようにする。

## 3 研究の計画

下記に示す指導計画に沿って、授業実践に取り組み、授業中の児童の活動の様子や、授業後の感想より、手だての有効性を検証する。

- |   |                             |                         |
|---|-----------------------------|-------------------------|
| 1 | 跳び箱運動                       | ・・・4時間（令和2年11月）（令和3年6月） |
|   | ・ 授業の流れの説明、体ほぐしの運動を兼ねた動きづくり |                         |
|   | ・ ロイター板の使い方、跳び箱の安全な設置について   |                         |
|   | ・ 開脚跳びのポイントを意識した練習          |                         |
|   | ・ 台上前転のポイントを意識した練習          |                         |
| 2 | マット運動                       | ・・・5時間（令和3年1月）（令和3年5月）  |
|   | ・ 前に回る技（前転、開脚前転）の練習         |                         |
|   | ・ 頭倒立の練習                    |                         |
|   | ・ 横に回る技（側方倒立回転）の練習          |                         |
|   | ・ 後ろに回る技（後転、開脚後転）の練習        |                         |
|   | ・ 2～3つの技を組み合わせた連続技を考えた練習    |                         |
|   | ・ 連続技を完成させる                 |                         |
| 3 | ハードル走                       | ・・・5時間（令和3年5月～6月）       |
|   | ・ 初めのタイム測定                  |                         |
|   | ・ 短距離走の走り方ドリル練習             |                         |
|   | ・ 1台目までの走り方の練習              |                         |
|   | ・ インターバルの走り方の練習             |                         |
|   | ・ 最後のタイム測定                  |                         |

## 4 実践と考察

### （1）跳び箱運動

ア 指導展開例（令和2年11月18日実施）

（ア） 本時の目標

- ・ 基本の技ができる。 （知識・技能）
- ・ 自分の課題に合った練習を工夫し、考えたことを友達に伝えることができる。

(思考・判断・表現)

- ・ きまりを守り、安全に気を配りながら仲間の考えや取り組みを認め、進んで運動に取り組もうとする。(主体的に学習に取り組む態度)

(イ) 指導過程

学 習 活 動	教師の働きかけと・支援
1 本時のめあてを確認する。	
開脚跳び・台上前転で意識するポイントを見つけよう。	
2 準備運動を行う。	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 体をほぐして、主運動に備えさせる。</li><li>・ 跳び箱運動に必要なストレッチや補強運動を行わせる。</li><li>・ 協力して練習の場を準備させる。</li><li>・ 安全に練習ができるように、マットの置き方に気をつけさせる。</li><li>・ 跳んだ後は、タブレットの動画遅延アプリで自分の動きを確認させる。</li><li>・ 自分なりに意識するポイントやアドバイスを拡大図に記入させる。</li><li>・ アドバイスを確認して、うまく跳べるようになるための自分なりのポイントを意識させる。</li><li>・ 協力して片付けさせる。</li><li>・ 練習で意識した点や、どんなアドバイスが自分に合っていたかなどを発表させる。</li></ul>
3 用具の準備をする。	
4 開脚跳び・台上前転の練習をする。	
5 用具の片付けをする。	
6 本時のふり返りをする。	

イ 練習の場の工夫

跳び箱運動では開脚跳びと台上前転に取り組ませた。跳び箱運動の授業の前に得手不得手を聞くと、苦手とする児童の多くは、失敗したときの痛みや恐怖感があることが大きな理由であることが分かった。そのため、まずはロイター板の正しい使い方や安全な練習の場づくりの説明をして、正しい練習法で、安全に留意した環境で練習すれば、大きなケガや事故にはつながらないということを理解させた。ロイター板と跳び箱の適切な距離感やセーフティーマットの設置方法、



(写真1) 安全な環境づくり

横から落下してしまった際のケガ防止のためのマットの置き方など、全員で確認し合いながら、協力して安全な環境づくりができるようにさせた。(写真1)

跳び箱の台数や段数も、待ち時間が多くなって運動量が減ってしまわないように、4～5台設置したり、開脚跳びの練習では3段～8段に、台上前転の練習

では1段～8段と、技によって低い段数を調節したりして、児童が自分の技能に合わせて選択していけるようにした。(写真2) さらに台上前転の練習では、狭い台の上で前転するという恐怖感を取り除くために、1段の跳び箱の上にマットをかぶせて、安心感の底上げをして、児童が思い切ってチャレンジできるようにした。

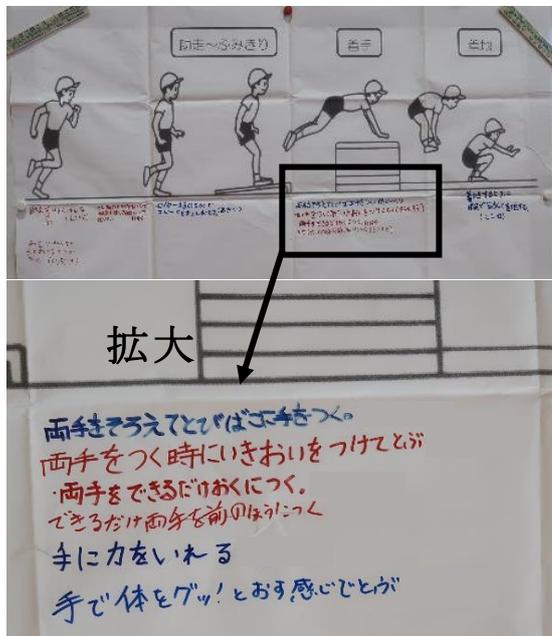
練習の場を工夫したことで、今まで跳び箱が苦手でなかなか積極的に取り組めていなかった児童が、安心してチャレンジすることができたり、少しずつ跳べるようになっていくごとに意欲が増したりする様子が見られた。目標の段がクリアできたときには、心から喜んでいた。



(写真2) 練習の場の工夫

#### ウ 学び合う活動の場の設定

跳び箱運動では、設置できる台数の限界があり、少人数のグループで活動することは難しい。そこで、本実践では順番待ちの時間を有効に活用できないかと考えた。跳び箱の動きを、「助走→踏み切り→着手→着地」の場面に分け、連続写真のような図を拡大印刷したアドバイスシートを用意し、ホワイトボードに掲示した。児童にはそれぞれの場面で意識しているポイントなどを、マジックペンでどんどん書き込んでいくように指示した。うまく跳べない友達へのアドバイスとなるようなコツや、言葉で説明できなくても、擬音語を使った感覚的なアドバイス、何を意識して練習したら跳べるようになったかなど、それぞれの児童が、それぞれの立場で情報交換をできるようにした。(写真3) 得意な児童は、自分がどんなことを意識して跳んでいるのかを考えながら練習に取り組み、的確なアドバイスを書き込むこ



(写真3) アドバイスシート

とができていたり、ポイントを意識することで、自分の技能もさらに伸ばすこともできたりしていた。苦手な児童はアドバイスシートを何度も確認しながら、ポイントを意識して跳べるようになるろうと、意欲的に活動することができた。

児童のふり返りにも、「〇〇君の『両足でグッと踏み切って、両手をそろえてパンツとつく』っていうアドバイスを意識したら、6段が跳べるようになった」「アドバイスシートにどんなことを書こうかと考えながら練習していたら、今までよりも着手や着地がきれいにできるようになった」というような意見が多く見られた。

このように、アドバイスシートを用意したことで、待ち時間の有効な使い方ができ、わざわざ話し合いの時間を取らなくても、紙面上で学び合うことができた。

## エ タブレットの活用

器械運動では、自分がどのように動いているのかを客観的に見ることが、上達していくために大切なことであるため、タブレットの動画遅延アプリを取り入れた。タブレットを全ての跳び箱の真横に設置し、踏み切りから着手、着地までが撮影できるように画角を調節し、10秒遅れで映像が流れ続けるように設定した。(写真4) 児童は着地後に自分の跳んでいる動画を見て、どんな動きをしているのかを確認し、上達するために意識するポイントを考えて。

友達に見てもらい、「ここは、こうするといよ。」などのアドバイスをもらっても、自分がどのように動いているのかはなかなかイメージできないものである。今回のように、自分が跳んでいる様子を、自分の目で見るとは、自分がどう動いているのか、どこをどのように改善すればよいのかなど、アドバイスをする方もされる方も、イメージがしやすいので、より具体的に効果的なアドバイスができていた。(写真5)

児童のふり返りにも、「自分は上手に跳んでいると思っていたけど、動画で確認したら、踏み切りのときにひざが曲がっていたり、跳び箱に手をつく位置がかなり手



(写真4) タブレットの設置



(写真5) 動画を確認する児童

前だったりしたから、それを意識して練習しました」「今日は、アドバイスシートの、手をつく位置はできるだけ前にというのを意識して練習しました。だんだん前の方に手がつけるようになるのを、動画で確認しながら練習したら、初めて5段が跳べるようになって、すごく嬉しかったです」というような意見がいくつも見られた。

また、5年生での実践では、一人一台タブレットを活用した。ペアを組んで、一人はAグループ、もう一人はBグループになるように分かれ、それぞれのグループが交互に練習と撮影をするように取り組ませた。Aグループが練習するときには、ペアの人に、「横からのアングルで、踏み切りから着地までの動画を撮ってほしい」というような要望を伝えながら、くり返し練習に取り組みさせた。順番待ちの時間には、撮ってもらった動画を確認して、アドバイスをし合ったり、「次は正面から撮って」などの確認をしたりして、時間を効率よく使うことを意識させた。(写真6・7)

一人一台タブレットを使えるようになったことで、このような活動ができ、運動量がしっかり確保できるようになった。さらに、二人で動画を撮り合っ

て、確認しながら練習することができ、ポイントを意識しながら、自分の技能に合った跳び箱で、より意欲的に活動することができた。

このように、動画で自分の動きを確認しながら練習に取り組みさせたことは、児童の技能向上や、意欲的に活動をしていくことに有効であったと思われる。



(写真6) ペアでの練習と撮影



(写真7) 動画を見てアドバイス

## (2) マット運動

### ア 指導展開例 (令和3年1月14日実施)

#### (ア) 本時の目標

- ・ 基本の技ができる。 (知識・技能)
- ・ 自分の課題に合った練習を工夫し、考えたことを友達に伝えることができる。 (思考・判断・表現)
- ・ 運動に進んで取り組み、きまりや安全を守って友達と一緒に取り組もうとする。 (主体的に学習に取り組む態度)

(イ) 指導過程

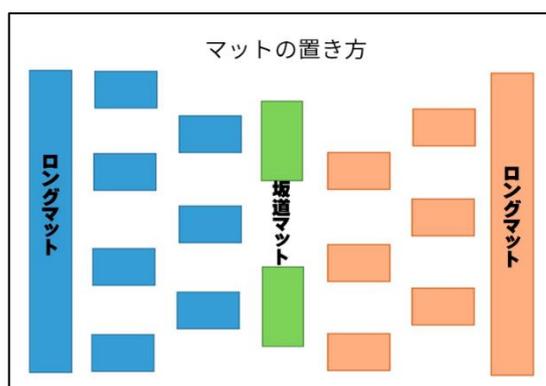
学 習 活 動	教師の働きかけと・支援
1  用具の準備をする。 2  本時のめあてを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>協力して練習の場を準備させる。</li> <li>安全に練習ができるように、マットの置き方に気をつけさせる。</li> </ul>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">             自分のできる技を増やして、連続技につなげていこう。           </div>	
3  準備運動を行う。 4  グループ練習をする。 5  用具の片付けをする。 6  本時のふり返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>体をほぐして、主運動に備えさせる。</li> <li>マット運動に必要なストレッチや補強運動を行わせる。</li> <li>動画ツールを使って、自分たちの動きを確認しながら、練習に取り組ませる。</li> <li>お互いに動画を見ながらアドバイスをし、うまくできるようになるためのポイントを意識させる。</li> <li>練習の場も考えて選択させる。</li> <li>できる技が決まってきたら、連続技の構成も考えさせる。</li> <li>協力して片付けさせる。</li> <li>練習で意識した点や、どんなアドバイスが自分に合っていたかなどを発表させる。</li> </ul>

イ 練習の場の工夫

マット運動では、前に回る技（前転、開脚前転）、頭倒立、横に回る技（側方倒立回転）、後ろに回る技（後転、開脚後転）の練習に取り組ませた。

跳び箱運動とは違い、一人一人の練習の回数をできるだけ多くするために、マット運動の練習の場は2～3人で一枚のマットを使用させて、できる限り多くの場を設定した。その際にも、マットとマットの間をしっかりと取ったり、回転する方向を一方向にしたりするなど、安全面には十分留意して設置させた。

さらに、後転練習用のロイター板の上にマットを敷いた、坂道マットや、連続技の練習用のロングマットも、授業進度に合わせて用意した。その際には、ロイロノートで図示しながら準備の指示をした。(写真8)



(写真8) マットの置き方の指示

後転が苦手な児童は、後ろ向きに回転することがうまくできないため、坂道マットで転がる勢いを借りながら、手をつく練習や、後ろに回転する感覚を覚えながら練習をすることができた。また、短いマットでは、側方倒立回転がはみ出してしまったり、一度に一つの技しか練習できなかつたりするため、ロングマットをうまく活用して、自分たちで練習の場を選択しながら活動することができた。(写真9)

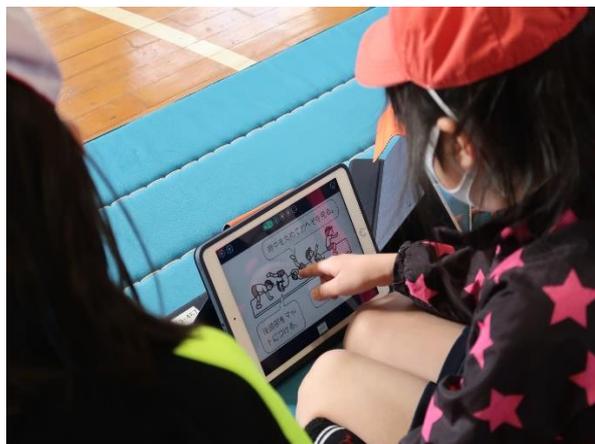


(写真9) 自分に合った練習の場の選択

ウ 一人一台タブレットを使った学び合い

マット運動の授業実践のタイミングで、一人一台タブレットが導入され、「ロイロノート」という学習ツールを体育の授業でも、うまく活用できないかと考え、本実践に取り入れることにした。

ロイロノートでは、教師が作成した資料を簡単に児童一人一人の手元に送ることができる。この機能を活用して、マット運動のそれぞれの技の手本となるスライドを作成して、児童に送信した。こうすることで、児童は自分のタブレットの画面で、確認したい技のポイントを、見たいタイミングで確認しながら、練習に取り組むことができた。(写真10) 以前は、体育館にパソコンを3台用意して、技の手本やポイントが収録されたDVDを見て確認できるようにしていたのだが、全児童が見たいときに活用することができず、あまり効率的ではない一面もあった。それが、今回、一人に一台タブレットがあることで、一気に効率化が進み、児童の技能習得、向上にとっても効果的であった。



(写真10) 技のポイントを確認する様子

さらに、ロイロノートには動画撮影の機能もある。グループやペアで技の練習をする際に、自分の技の動きを撮影してもらい、それを見ながら、「この時のここ。ひざが曲がっているから、伸ばせるともっと良くなるんじゃない」「頭倒立の手とおで

このつく位置の形が、お手本と比べると三角形がつぶれているから、おでこをもう少し前につくといいね」というような、かなり具体的なアドバイスをお互いに確認し合っ、練習に繰り返し取り組む様子が多く見られた。このように、どのグループでも自然と学び合いをすることができた。(写真 11)



(写真 11) 動画を見てアドバイス

児童のふり返りにも、「動画を撮ってもらって、お手本と見比べながら、意識するポイントを考えながら練習したら、後転が真っ直ぐに回れるようになりました」「同じ技の動画を、何回か撮ってもらったのを見比べると、意識していたことが、少しずつできるようになっていることが分かり、自分でもうまくなっていることが分かって、練習に一生懸命に取り組めました」というような意見が多く見られた。このことから、各自でロイノートを使ってマット運動の学習を進めたことは、児童の技能向上、そして学び合う活動に、とても有効であったと考える。

### (3) ハードル走

#### ア 「走る」という動きの意識作り

ハードル走の授業を進めるに当たって、児童にただ走るのではなく、短距離走の走り方、体をどのように動かすのかを考えて走ることを意識させるドリル練習を、初めに行った。(写真 12)



(写真 12) 「走る」動きづくり

短距離走の走り方のポイントは、「姿勢」「腕振り」「ひざ」の3つが大切だということを伝え、それを意識して自分の体を動かすことができるように、何種類かのドリル練習を指導した。児童は簡単なスキップやもも上げなどの動きも、何も考えずにやるのと、どこをどう動かすのかを意識してやるのとでは、動きが変わることに気付くことができた。また、体をひねりながらのクロスステップや、股関節のストレッチを取り入れたステップなど、普段はやらない少し難しいドリルは、初めはうまくできない児童がほとんどだった。しかし、動きのポイントを教え、とにかく「どこの部分を、どのように動かすのか」ということを意識してやることが大切だということを何度も言い聞かせ

ながら、毎時間のウォーミングアップとして取り組んでいった。3時間目にもなると、ほとんどの児童ができるようになって、できない友達にアドバイスする姿まで見られるようになった。初めてのときには、どう動いたらよいのか分からずに浮かぬ顔をしていた児童が、できるようになってきて、嬉しそうな顔で活動する姿を見ると、「できなかったことが、できるようになる」という成功体験は、難しい技能だけではなく、どんな簡単なことであっても、児童にとってはかけがえのないものになるのだということを感じた。

#### イ ハードル走の場面ごとの練習

今までは、ハードル走の授業を進めていくときに、児童の技能に合わせて、ハードルの高さや、インターバルの距離を何種類か設定して、自分に合った条件のレーンを選んで走る、というパターンが多くあった。その時には、「インターバルは3歩で走ること」や「リード足の膝は伸ばして、抜き足は地面と平行になるように」というような技能のポイントを指導して、自分にその走り方ができる条件のレーンを選ばせて練習に取り組ませていた。この進め方は、自分に合った条件のレーンでハードル走に取り組むことができるという反面、どうしても、一番高いハードルで一番長いインターバルで走った児童と、一番低いハードルで一番短いインターバルで走った児童との、明らかな“差”を、児童も、私自身も感じてしまう所があり、何とかできないか感じていた。

そこで、今回はハードルの高さやインターバルの距離を全員同じ条件にして、さらに児童には、安全面に関わることと「全てのハードルを同じリズムで跳びきること」だけを指導して、細かい技能などは教えずに練習に取り組ませることにした。そして、スタートからゴールまでの流れを、部分部分で切り取って、それぞれの場面で大切なことを意識させながら練習させた。

##### ① スタート～1台目の練習

まずは、スタートから1台目までの練習で、自分の跳びやすい足を見つけることを意識させた。(写真 13) くり返し練習することが大切なため、2～3人で1台のハードルを使い練習に取り組ませた。その際に、ペアで何歩で1台目まで走っているかを確認し合



(写真 13) スタート～1台目の練習

せ、「スタートから全力で走って毎回同じ歩数になること」を特に意識させた。児童たちは、「1、2、3、4…」と数えながら走ったり、自分の好きな言葉をリズムにして走ったりして、何度も練習に取り

組むことができた。

## ② インターバルの練習

次の段階は、ハードルを2台目まで設置して、インターバルの走り方の練習に取り組ませた。**(写真 14)** このときも、1台目までのときと同じように、練習機会を多くするために2～3人で2台のハードルを使わせた。ハードルの台数が足りないときにはカラーコーンを2つ組み合わせて、ハードルの代わりにして練習させた。



**(写真 14)** インターバルの練習

## ③ コースでのまとめ練習

その後は、隣のペアと合体して、4～5人組で3台、4台、コースで5台全部…とハードルを徐々に増やしながらか練習に取り組ませていった。**(写真 15)** その際に、「全てのハードルを同じリズムで跳ぶこと」が大切なことであることを何度も確認し、途中でインターバルの歩数が変わってしまう児童には、「なぜ変わってしまったのか、どうやったら同じリズムで最後まで跳びきれるのかをみんなで考えてごらん」と、グループでの学び合いを促した。



**(写真 15)** コースでのまとめ練習

児童は、「もっと遠くに跳ぶ感じがいいんじゃない」「4歩が無理なら、5歩にしてみたら」「3台目からかなりスピードが遅くなってるから、遅くならないようにしっかり腕を振ってみたら」というような、自分たちが練習してみて感じたことや、短距離走のドリルで学んだことなどを使って、アドバイスし合っていた。

ハードル走の場面ごとに切り取って、スモールステップで練習に取り組ませたことや、細かい技能についての指導をしなかったことは、児童が「どうしたらできるようになるのか」を考えて、自分たちで最適なハードル走の走り方を身に付けようとするにつながり、「主体的・対話的で、深い学び」に効果的であったと考える。

## ウ 一人一台タブレットの活用

今回のハードル走でもタブレットを活用して授業を進めた。マット運動や跳び箱運動と同様に、ハードル走の跳び方を練習していく際にも、自分の動きがどうなっているのかを客観的に見て確認し、練習していくことが上達への近道である。特に今回の授業では、技能のポイントを教えずに、自分たちで考えながら活動して、ポ

イントを見つけていくようにしたため、タブレットの活用がキーポイントになってくると考えた。

実際に、ペアや4～5人での活動の際に、児童はタブレットを使って動画を撮り合い、その動画を見ながら、気を付けるポイントや、改善点などを話し合い、次の練習につなげている様子が多く見られた。

(写真 16・17) また、撮影する場合は、ハードルの横からと正面からのアングルで撮影し合うように指示した。こうすることで、自分のハードルの跳び方を、しっかりと確認することができるからである。児童たちは、撮ってもらった動画を確認しながら、改善点を話し合い、何度も練習に取り組むことができていた。やはり、動画を活用することでハードル走が得意な児童も、苦手な児童も、それぞれが自分なりに考えながら活動することにつながったと考える。

さらに、ハードルの最適な跳び方や技能を考えさせるために、練習の間の休憩時間や雨天時の授業で、撮影し合った動画をロイノート

のシンキングツールの表を使って、記録・整理させた。(写真 18) こうすることで、自分がどのように上達してきているのか、具体的にどの部分ができるようになったのかなど、自分の成長記録を確認することができた。最終的には、お手本の動画とポイントを示した写真を児童に送信し、自分の跳び方と見比べて、気付いたことを記入して提出させた。児童は、自分なりに考えて工夫したことが正しかったことを喜んだり、気付けなかったことは来年につなげたりしていきたいと、自ら課題をもつことができていた。また、動画を提出させたことで、教師が評価をする面でも、即時評価と組み合わせることができ、より正確な評価をすることができるようになった。

これらのことから、タブレットの活用は、教師にとっても、児童にとっても、様々な面から効果的であったと考える。



(写真 17) 動画を確認する様子

練習 1 日目	練習 2 日目	練習 3 日目
正面から 	正面から 	正面から 
横から 	横から 	横から 
私は、上体を倒さず 真っ直ぐな姿勢で飛ん でいるので、気を付け たいと思いました。	私の走り方は大体 ハードルの近くで飛ん でいるので遠くで飛び たいと思いました。	脚を突き出して飛 んでいないので、 気を付けて行きたく いと思いました。

(写真 18) 振り返りシート

## 6 研究の成果と今後の課題

### (1) 成果

手だて①の「運動を楽しむために必要な動きを確実に身に付け、できる実感をもたせるための工夫」は、跳び箱の高さやマットの種類、ハードル走の練習の場を複数用意し、スモールステップで練習できる場を設定したことで、児童一人一人の運動能力や技能に応じて、安全かつ効率的に学習活動を進めることができた。そして、得手不得手に関わらず、どの児童も授業の初めよりも上達することができ、「できるようになった」という実感をもつことができた。

また、グループやペアで同じ技や、同じ条件での学習課題に取り組み、児童同士で学び合う活動の場を設定したことで、教師からの指示やアドバイスを、自分たちで声を掛け合って活動できたり、お互いに上達しようと、動きをよく見て考え、的確なアドバイスを送りあったりすることができ、より主体的に活動できた。

手だて②の「グループや全体で学び合うための工夫」は、児童にタブレットを活用して、自分の動きをすぐに動画で確認したり、動画を保存したりして、手本の画像と照らし合わせながら、意識するポイントを分かりやすくさせたことで、一人一人に合った、より具体的で的確なアドバイスをすることができた。さらに、自分の動きを自分の目で確認しながら練習に取り組めたことで、どこをどうすれば良いのかを、はっきりと意識して練習することができ、技能の習得、向上に効果的であった。また、自分の意識しているポイントをアドバイスシートに書き出し、全員で共有することができるようにしたことで、待ち時間の有効利用ができ、活動を止めて、話し合いの時間を設定しなくても、密集、密接を避けながら、学び合うことができた。さらに、自分の行動が仲間の技術向上に役立っているということが、自身の次への意欲にもつながった。

### (1) 課題

本実践では多くの場面でタブレットを活用したが、児童にとっても、教師にとっても、効果的に使うには、事前にしっかりとした準備や、使い方の説明が必要だと感じた。体育の授業は体を動かすことが大前提なため、タブレットの操作に時間を取られすぎると本末転倒である。また、即時評価と事後評価をバランス良く行い、児童一人一人に対して、本当に必要なアドバイスや、適切な評価ができていくかどうかを、常に考え、改善しながら進めていくことが大切であると感じた。

また、体育の授業でのタブレットの活用は、全ての学年のどんな種目でも取り入れることができると思われる。しかし、運動量とのバランスや、どんな技能を伸ばすためにどのように使っていくのかなど、じっくりと教材研究をし、十分に効果的な活用ができると予測を立ててから、使用していくことが必要になると考える。